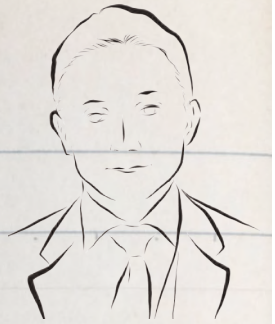
我孫子通信
文人の郷だより

通信 第十一

令和５年度春号

辻説法 館長のつぶやき



第１３回　フジの花をめぐって

▶フジ（学名 Wisteria floribunda）はマメ科フジ属のつる性植物で、日本の固有種である。長く房のように垂れ下がる紫色の花は、文字通り「藤色」の語源となり、藤棚や鉢植えで花を鑑賞するだけでなく、丈夫な蔓（つる）は籠や布の素材として使用された。古くは『万葉集』にも「藤波」（藤の花が波のように揺れていることから）として数多く詠まれるほか、「藤紋」は十大家紋の一つであり、「藤娘」は大津絵や日本舞踊、日本人形の定番と言って良い。日本人にとっては馴染みの深い花であると言える。フジが「不死」「不尽」に通じるのも、縁起の良い花と言われる所以だろう（『鬼滅の刃』をご覧ください（笑））。

▶フジといえば、志賀直哉のオムニバス小説『矢島柳堂』（大正 14（1925）年）の「白藤」で取り上げられている。設定は恐らく我孫子。画家の矢島柳堂は、庭先に植えた白藤をとても気に入り眺めていたが、蔓が左から右の同じ向きに巻いていることを発見した。弟子を「近所の別荘」にやって調べさせると、蔓は右から左の逆巻きになっていた。驚いた矢島は翌日「不動の滝前」（我孫子市の滝前不動か）の藤を調べさせると、矢島のものと同じく左から右巻きとなっていて、大発見だと得意になった、という話だ。

▶フジにはノダフジとヤマフジの二種類がある。ノダフジの一つの特徴として蔓は右巻きで、ヤマフジの蔓は左巻きとなる。明治末期この発見をして分類をしたのがＮＨＫの朝ドラで注目されている植物学者 牧野富太郎である。志賀が牧野博士の業績を知っていたのかは分からないが、着目点として興味深い。

『植物研究雑誌』第８巻第５号（昭和７年５月）
「日本ノふぢ、支那ノふぢ、野田ノふぢ」牧野富太郎
野田は大阪市にある。「吉野の桜、野田の藤」と唄われた

▶というのも、志賀自身が藤棚を作っていたことがうかがえるのだ。志賀の小説『流行感冒』（大正８（1919）年）には「上の離れ屋の廻りに木を植えるためにその頃毎日二、三人植木屋がはいっていた。Ｙから貰った大きな藤の棚を作るのにも、少し日がかかった。」とある。大正７（1918）年に建てた、志賀邸の丘の上の離れ屋の付近に藤棚、それも「Ｙ」から貰ったというから、

裏面へ続く…

志賀のほかの小説で「Y」とされる人物、つまりは我孫子に住まいを構えた「柳宗悦」から譲られた藤を棚仕立てにしていたようなのだ。

▶確かに、柳宗悦の我孫子の自宅「三樹荘」に設けられた書斎「竹林軒」の写真を見ると（著作権の関係で、『民藝』740号「特集　我孫子と柳宗悦」の写真をご覧くださいませ）、南側に縁台が設けられ、藤棚のような構造物が認められる。親友からもらった藤を自分の住まいに移植しようと、いそしむ志賀の姿が浮かんでくる。そして毎日観察して、蔓の巻き方に気が付いたのではないか？

▶フジ好き、という意味では杉村楚人冠も負けていない（正確に言うとフジの花は好きだが、フジの木は他の植物を痛めるので嫌いだそうだ）。「澤の家」と名付けた離れの南側に藤棚を設けていたことが写真で明らかになっている。また、随筆『湖畔吟』には「藤」という文章があり、「つつましやかに垂れ下がった房が、つつましやかなゆかりの色（註：紫色）の花をつけて、あたりの若葉の中にうき出たように咲き乱れたのを、静な暁がたにながめる趣は、又とたぐえつべきものもない（註：比較できるものもない）。」と讃えている。

楚人冠邸園の中にある「澤の家」の写真縁側には藤棚が設置されていたのがわかる。藤棚の先には、池、梅林とつづき、奥には手賀沼が望めた

▶杉村のフジに関しては、杉村楚人冠記念館の企画展「『湖畔吟』の世界　『湖畔吟』に咲いた花々」（7月9日まで）で取り上げいるのでぜひご覧ください。

▶先だって、初めて「あしかがフラワーパーク」に出かけて、大藤を鑑賞した。訪れる人の多さと、外国人比率、特に東南アジア系の方が高いことに驚いた。いわゆるインスタ映えが理由だろうか？5月の風にたなびく藤波と蔓の巻き方を眺めながら尽きぬ思いを巡らせた。

あしかがフラワーパークの大藤、令和5年5月撮影

コラム「辻説法」について

辻説法とは、人が集まる町角（＝辻）で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

六号雑感（編集後記）

●今回はNHK朝ドラの主人公牧野富太郎さんが出てきました。辻説法でご紹介した『植物研究雑誌』を読むと、あけぼのふじの学名には「Makino」が入っていることから、彼の研究の幅に驚かされます。彼は生涯で1,500以上の植物を命名しました。●牧野の名言で「雑草という草はない」という言葉があります。今回、両学芸員がお話した人間主観への警鐘に通じるものだと思い、図らずも我孫子通信のお題が繋がったと満足しています。（K）

発行：我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課　〒270-1166　我孫子市我孫子1684番地　04-7185-1583

テーマは「文人たちと動物」

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺

志賀の犬好きは、有名な話である。「畜犬に就いて」（一九二〇）では次のように語っている。「犬が無用か有用かは扨（さて）て置き、有用に使はうと思へば、どんなにでもその用途に従ひ、趣味に従ひ、その方に発達さす事が出来る、さう云ふ可能性を持つた動物として犬程のものは決して他にないと思ひます。（中略）それから、実用方面でなく、感情の上の飼主と飼犬との交渉は或る場合実用遥か以上に却々（なかなか）馬鹿にならない価値あるものと考へます。」

なんとも志賀らしい冷静な分析だ。もうひとつ引用するのは、「閑人妄語―「世界」の「私の信条」の為めに―」（一九五〇）である。

「動物の世界も強食弱肉で、生存競争は却々烈しいが、何かその間に調和みたやうなものも感じられ、人間の戦争程残忍な感じがしない。つまりそれは自然の法則内の事だからかもしれない。人間同士の今日の殺し合は自然の法則の外である。人間は動物出身でありながら、よくぞこれまで進歩したものだといふ事は驚嘆に値するが、限界を知らぬと云ふ事が人間の盲点となつて、自らを亡すやうになるのではないか。総ての動物中、とび離れて賢い動物でありながら、結果からいふと、一番馬鹿な動物だつたといふ事になるのではないかといふ気がする。」

常々人は生きているのではなく、生かされているのだと感じてきた。引用した作品の執筆年からそれぞれ、志賀三七歳（我孫子）、六七歳（熱海）の時のものである。志賀は描写力もさることながら、分析力も見事なものだと思う。「俯瞰力」とでもいうべき力を若い頃から培ってきたものと思う。

白樺生活十一年目を迎えるかと思っていたが、四月から白樺・杉村を管理する文化・スポーツ課に常勤学芸員として採用配置された。長年居た場所を離れ、慣れぬことも多々あり、日々勉強、修行の日々である。そんな折、このコラム執筆に際して、自らが冷静ではいないことを志賀の文章から痛感する。「俯瞰力」に加えて「不感（鈍感？）力」も身に付ける必要があるのではないかと思う今日この頃である。

（稲村隆）

志賀直哉用紙

コラム「我孫子から」について

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。

白馬城放語

杉村楚人冠記念館
学芸員コラム

フラグヒサア

楚人冠が我孫子での生活を綴った随筆『湖畔吟』には、自らが関わった動物たちについて述べているものも多い。楚人冠といえば椿に代表されるように、植物に愛情を注ぐ印象が強いためか、動物の話が出てくるというのは、意外と新鮮な心地がする。生きとし生けるもの全てに興味を持ち、愛を注いだ男、それが楚人冠なのであろう。

楚人冠と動物のエピソードとして、最も有名でインパクトがあるのは、やはり伝書鳩の話であろう。楚人冠は我孫子へ転居した後も、東京の本社へ汽車（常磐線）を使って通勤していた。楚人冠邸にはこの時代、一般には珍しかった電話も設置されていたので、簡単な要件なら社に電話をかけるだけで済んだ。しかし、汽車に乗って出勤するほどではないが、電話で済む短い話でもない、という何とも微妙な要件もあった。そんな時、楚人冠が使った手段が、何を隠そう伝書鳩であった。当館では、楚人冠が自身の鳩の脚につけていたリングを所蔵している。また現存しないが、邸内には鳩小屋も完備されていた。館内の解説時にこの伝書鳩の話をすると、老若男女問わず、皆一斉に鳩が豆鉄砲を食ったような顔になる。そんな驚きの顔が見たいがために、このエピソードを話していると言っても過言ではない。私が伝書鳩で何かを成し遂げたわけでもないが、何故だかこの話をすると、自分がものすごいことをしたような気になるのだ。子どもたちは決まって「本当に鳩が手紙を届けてくれるのー!?」とざわめく。実際に見ているわけではないので、私の方が本当に届いたのか聞きたいくらいなのだが、それは決して口にせず、「届いたんだな、これが」と物知り顔で微笑む。

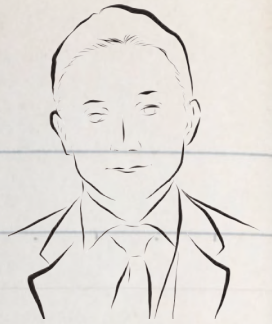
「伝書鳩」（『続湖畔吟』所収）にも記述があるが、鳩は害鳥に分類される。随筆には「人に親しみ易い可愛い鳥でありながら（中略）鉄砲で打ち取ってもかまわぬことになっている」とある。鳩を可愛がる者もいれば、大層嫌う者もいる。人間の都合でメッセンジャーにされたり、平和の象徴と祭り上げられたり、あまつさえ殺されたり…鳩の世界もなかなか理不尽で過酷だ、我々人間の世界に負けず劣らず。

（武藤真奈）

コラム「白馬城放語」について
杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆に由来しています。

我孫子通信
文人の郷だより
通信 第十二
令和５年度夏号

辻説法 館長のつぶやき



第１４回　文人たちの関東大震災～杉村楚人冠の地震対策

▶大正１２（１９２３）年９月１日に発生した関東大震災は推定１０万５千人もの死者を出し、明治以降、日本が進めてきた近代化の成果である帝都東京が文字通り灰燼（かいじん）に帰した。

▶大震災当時、杉村楚人冠は東京大森に住まいを構え、週末に我孫子の別荘（現在の杉村楚人冠記念館　澤の家）で過ごしていたが、大震災発生時に病院に入院していた２児が建物倒壊に巻き込まれて不慮の死を遂げた。また銀座の滝山町にあった東京朝日新聞社は地震がきっかけとなって発生した火災に巻き込まれ、杉村が肝入りで推し進めた調査部ともに灰となり、日刊『アサヒグラフ』も廃刊となってしまった。

▶一方で、大震災によって我孫子に家族ごと移住し、そこで出会った人やできごとが随筆集『湖畔吟』につながっていく。このあたりの顛末（てんまつ）は『湖畔吟』所載の「ごたごたの趣味」で「人生の最大不幸に出あった私は(中略)どれほどの不幸に堪え得るか、ためしてやろうというような気になった。」と自虐気味に語っている。

▶我孫子への移住に当たって、杉村は杉村楚人冠記念館の母屋を建設するが、設計をアメリカ帰りの建築家下田菊太郎に依頼した。アメリカでは明治３９（１９０６）年のサンフランシスコ地震をきっかけに耐震建築法が広がり、下田はその第一人者という触れ込みで横浜や神戸、長崎などの外国人コミュニティで活動していたらしい。杉村と下田の接点は不明だが、二人とも英語が堪能であり、反骨気質。自宅の耐震化を目指す杉村と意見が一致したのだろう。しかし今でもよくあることだが、依頼主と建築家は衝突しがち！で、最終的には弁護士を立てて違約金を払い、下田と縁を切ることができた。

▶関東大震災は文人たちに大きな影響をもたらした。志賀直哉は京都に移住しており、大きな被害に遭わなかったが、東京に住む父母一家と友人たちが心配になり、友人と信越線経由の汽車に乗り込んで安否確認をしに東京に向かった。志賀の『震災見舞（日記）』はその際に体験したことを記した生々しいルポルタージュであり、巷（ちまた）で飛び交うフェイクニュースを抑えようと腐心する志賀たちの様子がわかる。しかし、残念ながら雑誌『白樺』は廃刊となり、志賀は名実ともに職業作家として生きていくこととなった。志賀の友人で、『白樺』とも縁が深い画家　岸田劉生は鵠沼の自宅が倒壊、九死に一生を得て、京都に移住し、東洋と日本の美に開眼した。

裏面へ続く…

▶谷崎潤一郎は箱根で震災に遭遇、横浜の自宅が類焼し、これを機に関西に移住して日本の伝統美を意識した小説に取り組む。随筆『東京をおもう』には、地震嫌いで臆病な谷崎が一時的な避難のつもりで関西に来たが、乱雑な東京に比べてはるかに魅力的であった、と述懐している。永井荷風は自宅の偏奇館は焼けなかったものの、明治期に建てられた西洋風建築物が焼け落ちるのを眺めて「愚民を欺くいかさま物に過ぎざれば、灰燼になりしとてさして惜しむに及ばず」（『断腸亭日乗』）、と突き放した見方をしている。「戯作者」の面目躍如だ。

▶大震災という未曽有の出来事は決して肯定されるものではないが、彼ら文人の感性を刺激し、人生の岐路になったことは間違いないだろう。

▶大震災を受けて杉村が彼らと異なるのは、やはり子どもの圧死、という衝撃であろう。

▶杉村の母屋を眺めてみると、鋼板葺きで軽量化した屋根、天井裏には軽量な木材を組み合わせた頑丈なトラス構造、天井高を低くして低重心化が図られ、現在でも通じる下田菊太郎の先進的な思想が見て取れる。また自分でも作り付け本棚を発注し、家具倒壊を防ぐ手立てを講じている。杉村は天井が低いだの文句を言いながらも、家の部分改修を行いながら終生この家に暮らし続けたのも、彼一流の地震との折り合いの付け方ではなかったか。

楚人冠記念館のサロン奥に見える本棚は壁に固定されており、地震で倒れてこないようになっている。

▶今年は関東大震災から１００年が経つ。10月１日まで杉村楚人冠記念館では「夏期企画展関東大震災100年展示　１９２３－関東大震災を生きた人々－」を開催している。展示とともに、記念館に込められた地震への備えを感じていただきたい。

楚人冠が刊行に携わった『アサヒグラフ』震災の様子を記録した特別号

コラム「辻説法」について

辻説法とは、人が集まる町角（＝辻）で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

六号雑感（編集後記）

●ちょうど一年前の通信第八でお話した「震災」の話と展示のことを本号でご紹介できて安心しています。●今回のテーマは海でしたが、測らずも「生み出す」と「生を満喫」と、「生きる」ことも共通の話題になりました。関東大震災の展示では人々が震災と向き合ってどう生きたのか、式場隆三郎示では彼の研究・功績を展示するほかに、障がいと向き合ってどう生きるのかについて展示をとおして紹介しています。暑い夏ですが、ぜひ各館へお越しください。（K）

発行：我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課　〒270-1166　我孫子市我孫子1684番地　04-7185-1583

テーマは「海」

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺

志賀直哉用紙

志賀で海というとやはり熱海である。「熱海と東京」（一九五六）は、終の棲家である渋谷に引っ越した後に記したもので、熱海の頃を振り返り次のように語っている。

「初めの頃は熱海の家が恋しくて弱つた。あの海の景色がいつまでも心に残つてゐた。この間、一週間程三河の蒲郡に行つたが、似たやうな景色で、感じがずいぶん異ふと思つた。相模灘に比べて海の浅い事が不満だつた。見えるのは海面で、深いか浅いか分らないから同じ事だといふやうに一寸考へられるが、深いか浅いかは何となく感じられ、矢張り海は深くないと、景色としてよくない。いい例が松島で昔から日本三景の一つとして有名だが、海が浅いので、私は少しもいい景色とは思はない。あれは陸地に海水が溜まつたので本当の海ではないからだ。」

いかにも志賀らしい批評である。また「熱海では動物を飼ふ楽みもあり、野生の動物を見る愉しさもあつた。海を眺めてゐて海豚の群を二度見た」ということで、これまたおなじみの志賀の動物好きの側面も熱海では出ているようだ。

六月下旬、小学校以来の友人と伊豆半島へ旅に出た。最初は忘れていたが、真鶴と熱海を通ることを思い出し、中川一政美術館と志賀の熱海時代の遺構を一部使用している麦とろ童子に寄ることとした。麦とろ童子はなかなかの人気店であったが、志賀の遺構だからと訪ねている人はみかけなかった。料理もさることながら、店員の洒落のきいた接客、何より眺めの良い場所で客たちが写真を撮る姿が印象的だった。老若男女問わずＳＮＳが日常化し、気軽に写真を撮るのが当たり前の風景と化したが、志賀の随筆などはまさにＳＮＳの先駆け的存在のような気がする。このコラムもあまり無理をせず、さらりと日常を描きたい。白樺にあまり滞在しなくなり、「うみだす」力が落ちていると感じる今日この頃。「人はどうして悲しくなると海を見つめにくるのでしょうか」とはなっていないが、「迷い道くねくね」な気はしている。夏の水難事故の話をよく聞く。お出かけの際はどうぞお気をつけて。

（稲村隆）

コラム「我孫子から」について

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。

白馬城放語

杉村楚人冠記念館
学芸員コラム

フラグヒサア

コラム「白馬城放語」について

杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆に由来しています。

夏のこの時期記念館にいて、常に木々の緑と蝉しぐれに囲まれていると、やはり涼しげな海が恋しくなる。水辺という括りで考えると近くに手賀沼はあるものの、干拓の影響で楚人冠が暮らしていた当時のように、邸内から手賀沼を眺めることはできない。見えないのなら、ないものと同じである。地震対策で屋根が銅板葺きのため、蒸し風呂のように暑い館内で少しでも涼を求めて、クーラーの付近をさまよう。

さて、楚人冠改め広太郎少年は生まれが和歌山ということもあり、上京以前は友人らと一緒によく海で遊んでいたようである。友人宅のあった加太町（現在の和歌山市）の海辺にて貝拾いをしたり、魚釣りをしたりと、青春を謳歌している。ジャーナリスト楚人冠にもそんな時期があったのかと一瞬しみじみ思ったが、ゴルフをしたり、舞台を鑑賞したりと、大人になったらなったで生を満喫しているなと思い直した。何はともあれ、父親がいないことと痩せこけていたことで幼少の頃より散々いじめられ、小学校は不登校になり、母とみにべったりだった広太郎が、眩しい日差しの下で友と遊び回るまでに肉体的・精神的に回復・成長した事実に、驚きと喜びを感じる。ちなみにこの和歌山時代の友人、紀俊秀（政治家）と利光平夫（工学博士）、そして広太郎の三人は、美少年ということで周囲の注目を集めていたらしい。

余談であるが、楚人冠は情報交換や多種多様な人々との交流を楽しむため、多くの趣味の会に所属していた。その一つに、食事をしながら親交を深める「靡南会（びなん）」がある。なんとも俗っぽく、所謂「オヤジギャグ」らしいが、名前をみるかぎりではどうやら「美男」が美味しい食事に舌鼓を打ちながら、仕事や政治、趣味の話に花を咲かせる会であったようだ。私は楚人冠と違い、「毘叙会（びじょ）」に入会する勇気はないが、皆さんはどうであろうか。

今年の夏は広太郎少年になったつもりで、我孫子から羽を伸ばして加太の海辺で遊ぶというのもおつかもしれない。もちろんこの異常な暑さ、熱中症と日焼けには十分注意しながら。

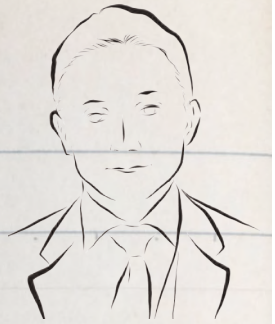
（武藤真奈）

我孫子通信
文人の郷だより

通信 第十三

令和５年度秋号

辻説法 館長のつぶやき



第１４回　「はくせい屋」と「埴輪屋」

▶杉村楚人冠の随筆『湖畔吟（こはんぎん）』に「はくせい屋」という興味深いコラムがある。「この村には手先の器用な人が多い。英人リーチがリーチ好みの家具というのを、神田の小川町で売りに出して好評を博したことがあるが、これはリーチの意匠で村の大工が造ったのであった」

▶白樺派の一人、バーナード・リーチは、友の志賀、柳のいる我孫子に大正５（１９１６）年から大正８（１９１９）年まで滞在し、６年には柳の住む三樹荘で窯を築き、作陶した。その傍らで、リーチは家具のデザインを手掛けている。家具を作ったのは我孫子の大工　佐藤鷹蔵。佐藤は志賀の小説『雪の遠足』に「Ｓ大工」として登場する。志賀の離れの書斎（我孫子市指定文化財）を手掛け、大正１３（１９２４）年には杉村の母屋の作り付け本棚なども作った。リーチはたびたび自分の作品を神田逸流荘というギャラリーで展示販売しているが、「はくせい屋」の記述では、杉村はそのことを知った上で、自分の家の本棚を佐藤に発注したことが分かる。

▶リーチデザインの椅子は、リーチの親友、濱田庄司の家（濱田庄司記念益子参考館）にテーブルと椅子のセットとして残されているほか、我孫子の旧村川別荘（東京帝国大学教授　村川堅固が大正１０年に設けた別荘。我孫子市指定文化財）に椅子２脚が残されている。村川と志賀・柳・リーチの直接の接点は不明であり、村川がこの椅子を入手した経緯は不明である。柳が大正１０年、志賀が大正１２年に我孫子を去り、入れ替わるように我孫子に別荘を設けた村川堅固が「誰か」を介して入手した、と想定される。

旧村川別荘新館にあるリーチデザインの三角椅子

▶大正１３年以前、別荘を設けて我孫子に滞在していた杉村は、柳宗悦の妻　兼子と我孫子で会話を交わしたという兼子の証言があるので、柳たちの存在を知らなかった訳ではないが、積極的に交流したことはうかがえない。

裏面へ続く…

▶私は、杉村が白樺派と積極的に交流をしなかったのは「別荘人として節度」と理解したい。安息の場所として出かける以上、必要以上の人間関係を構築する理由はなかったのではないか。また、東京の百貨店から家具を取り寄せることもあった杉村だが、リーチの椅子を手掛けた佐藤鷹蔵の力量を高く評価し、自らの家具作りにも採用した。良いものは良い、という発想は「民藝」にも通じるものがある。

▶「はくせい屋」ではまた、提灯屋が器用な手先を活かしてはくせいを作って東京に販売していることが書かれている。杉村家に残されていた昭和２年の我孫子町の地図には、提灯屋かどうかは分からないが、我孫子駅近くに「ハクセイ屋　小熊昆虫研究所」とあり、地域資源を活かした生業が営まれていたことが分かる。ちなみに、別荘に訪れた村川堅固の息子堅太郎が父に頼んでリスのはくせいを買ってもらったことを日記に記しており、「はくせい」は我孫子のお土産として知られていたようだ。

我孫子駅前の様子、中央の集団は現在の国道 356 号を歩いている。中央左側に「ハクセイ屋」の看板が見える。

▶また、「はくせい屋」には「埴輪（はにわ）屋」が記される。「今一つは埴輪屋である。これはここの瀬戸物屋の主人が、この辺で発掘さるる土器を寸分たがわず模造して教育用品として売っているので、男女一対の人形と馬と円筒とで一組になっている。東京から遊びに来た人は珍しがって買って行く」とあり、お土産として「埴輪」が売られていた。

▶柳宗悦は、大正４（１９１５）年に書いた「我孫子から（通信第二）」の中に「湖畔一帯に無数の古墳がある（中略）古墳から出る石器、土器を（後略）」とあり、手賀沼周辺に古墳が多くあり、遺物が多く出土することを認識している。志賀直哉も『十一月三日午後の事』の草稿に、「畑中の塚」という表現があり、白樺派など我孫子を訪れる人にとって、古代の遺跡があることは我孫子の特徴として捉えていたようなのだ。

▶今から十数年前、開館前の杉村楚人冠邸の調査を行った際、杉村の庭で、明らかに古代のものではない人物埴輪の破片を複数発見した。これが「埴輪屋」のものかどうかは分からないが、杉村が私たちに遺したギフトだったのか。

コラム「辻説法」について

辻説法とは、人が集まる町角（＝辻）で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

六号雑感（編集後記）

●お届が遅くなり申し訳ありませんでした。秋号をお届けいたします。今回は、コラムもさることながら、各館でのイベントが盛りだくさんです。年パスホルダーの方は予約不要のイベントもありますので、ぜひ、お気軽にご参加ください。●２月 23 日に旧井上家住宅で開催されるイベントは、杉村楚人冠邸園で採れた椿の種を使った開運飾り作りなど、ワークショップも行いますので、詳しくは旧井上家住宅ホームページをご覧ください。（K）

発行：我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課　〒 270-1166　我孫子市我孫子 1684 番地　04-7185-1583

テーマは「果物」

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺

「果物」と言えば、武者小路実篤を思い浮かべる。画賛といい、「仲良きことは美しきかな」が一番有名だろう。志賀直哉たちはあまりお酒は飲まないため、甘いものを好むようで、果物のエピソードと思い、さぁ調べようと思っていたら、秋は忙しく、ついに原稿がかなり遅れてしまう事態になり、今回に限り、いつもの稲村雑談的文章が長くなることをお許しいただきたい。

九月末についに流行感冒ではなくコロナに罹患した。一週間丸々休んでしまい、不本意な休みを過ごした。救いだったのは薬価が上がるギリギリ前であったことだ。保険制度に感謝したことはこれで二度目である。

二〇一五年、やはり不本意な休みを取った。その際は入院し、手術をした。その後通院は続いたが、嵐の日々を一時忘れることができた。その後開催したのが、快気祝いの懇親会だった。その懇親会は定例化し、毎年続いた。コロナで途切れたが、先日四年ぶりに開催することができ、参加者は過去最高の二〇名を数えた。この四年間で培った出会いと絆の産物といえる人々が参加し、まさにその笑顔は、私にとってのおいしく実った「果物」だった。

志賀たちの人生を見ていると、本当に人が好きなのだと思う。嫌いになるときもあるだろう。今年亡くなった谷村新司のグループ、アリスの「狂った果実」（一九八〇）には次のようにある。

狂った果実にも見る夢はあるけれど　　どうせ絵空事ならいっそ黙ってしまおう
せめてこの胸が裂けるまで　　Silence is Truth!

志賀たちには、わからないかもしれない。彼らは絵空事を形にしようと動き、してきた人々であるから。それはこの言葉に集約されているだろう。

「仲良きことは美しきかな」
どうぞ健やかな信念を迎えられますことをご祈念申し上げます。

（稲村隆）

志賀直哉用紙

コラム「我孫子から」について
柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。

白馬城放語

杉村楚人冠記念館
学芸員コラム

フラグヒサア

皆さんは千疋屋総本店の「ピーチパフェ」を食べたことがあるだろうか。夏のわずかな時期にのみお目にかかることのできる、とにかく桃づくしのパフェである。口に入れた桃は、まるで紐がするりと解けるように一瞬で溶け、優しく柔らかくみずみずしい甘さが鼻孔を抜けていく。お値段以外はとても素晴らしいパフェなのである。

千疋屋は天保五年（一八三四）に誕生した。初めは「水くわし（水菓子・果物）安うり処」の看板を掲げた露店であった。江戸庶民に愛された千疋屋は着々と成長し、役人や文人等、客同士のパイプ作りの場としても機能することとなり、そんな客層の変化に合わせて果物のグレードも、品種改良を重ねどんどんと上がっていった。明治に入ると日本の西洋化に伴い、西洋風のハイカラな食事を楽しめる店として果物食堂（現在のフルーツパーラー）をオープンしたのだった。

さて、楚人冠は趣味として果物を食べる会に加入していた。その一つが、千疋屋にて珍しい果物の試食を楽しむ「清光会」であった。この会は、黒板勝美（歴史学者）や和田三造（洋画家）を幹事としていたらしい。《南風》（東京国立近代美術館蔵）にみられるような、古代ギリシア彫刻も真っ青な筋骨隆々とした逞しい人体を描いていた和田が、この会で楚人冠と共に、甘く可愛らしい宝石のような果物に舌鼓を打っていたかと思うと、何とも微笑ましい限りである。

「自然味」（杉村楚人冠『新選文』所収）に、この清光会の活動が記載されている。昭和六年（一九三一）春の例会では、多種多様なみかんを味わった。その中でも一番美味だと皆が褒めたのは、小ぶりで種の多い有田みかんであった。この種のみかんは、子孫繁栄の観点から種なしみかんが珍重されていなかった時代、江戸に輸出されていたものらしい。品種改良を繰り返しても、皆が求め行き着くのは、結局オリジナルにより近いものなのであろう。

こたつでみかんを食べる季節が近づいている。千疋屋で様々な種類のみかんを買ってきて、じっくりと食べ比べをしながら味わうのも良いかもしれない。

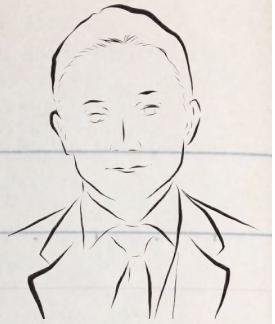
（武藤真奈）

コラム「白馬城放語」について

杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆に由来しています。

我孫子通信
文人の郷だより
通信第十四
令和５年度冬号

辻説法 館長のつぶやき



第１５回 「船を掘る」話

▶『舟を編む』は三浦しをんの人気小説だが、今から百年前の大正１３（１９２４）年、『船を掘りに』というエッセイを書いた作家がいた。杉村楚人冠である（後に『湖畔吟』に掲載）。

▶「『旦那、船を掘りに行ってみませんか』と、村の勘兵衛さんから誘われた」という唐突な書き出しで始まるこのエッセイは、冒頭に、勘兵衛さんが土器のイミテーション作りを生業（なりわい）にしていること（これは前回の辻説法「はくせい屋と埴輪屋」で触れた、埴輪屋と同じ人物かもしれない）、我孫子には貝塚や古墳が至るところにあって、石斧や埴輪などが見つかる遺跡の宝庫であることが記されている。明治３２（１８９９）年、東京帝国大学理科大学人類学教室教授の坪井正五郎が我孫子にも調査に赴き、遺物の採集を行っている。柳宗悦も大正４（１９１５）年の「我孫子から（通信第二）」において、無数の古墳や石器や土器が出土することに触れている。我孫子は東京近郊にあって土器を拾える場所として知識人から認識されていたようだ。都市化が進んだ現在でも、我孫子駅南東側では５基の古墳（子ノ神古墳群）が残っており、当時の様子を忍ばせている。

▶さて、本題の船のことであるが、杉村の分析では、前年の関東大震災で手賀沼の底が激しくかき回されて、絡まっていた藻の根から解き放たれたいにしえの沈船が、夏の渇水で手賀沼の水位が下がったため掘り出すことができたのだろう、と推測している。実際、関東大震災では我孫子など千葉県下においても相当の揺れがあって、建物の損壊なども記録されているが、船が浮き上がったこととの因果関係は定かではない。

▶村人が沈船を記念に壊して持ち去ることに心を痛めた杉村が相談したのは「古代船舶の研究で聞えた西村真次君」という人物だ。西村真次は東京専門学校（早稲田大学）在学中に日露戦争に陸軍輜重輸卒（しちょうゆそつ）（軍需物資運搬担当）として従軍し体験記『血汗』を執筆した。卒業後の明治４０（１９０７）年に東京朝日新聞社に入社（同じころに在社したのが石川啄木、夏目漱石、半井桃水（なからいとうすい）、渋川玄耳（しぶかわげんじ）、そして杉村楚人冠）、３年ほどで冨山房に移って多くの文化人との交流から世界史上の古代船舶研究を志し、大正１１（１９２２）年には早稲田大学教授となって歴史学と人類学を講義した。『人類学汎論』、『日本古代船舶研究』、『蝉の研究』、『万葉集の文化史的研究』など様々なジャンルの研究論文を執筆した知識人で、杉村が東京朝日新聞社で培

裏面へ続く…

った人脈を活かした人選だ。

▶いくつか沼から引き上げられた丸木舟（独木舟）のうち、滝前の不動（我孫子市岡発戸）に引き上げられたものには金属製の刃物の加工痕があることを見つけた西村は、約一千年前の新しいものではないか、と判定した。ここからほど近い岡発戸新田の八幡神社の社殿にはこの舟と思われる木片が提げられており、科学的年代分析（Ｃ１４分析）を行ったところ、西暦１４８０年頃のもので、中世の船の一部と分かった。年代に差異はあるものの、西村の観察眼の高さをうかがわせるものだ。

手賀沼遊歩道を歩くと見えてくる八幡神社の西側の壁に掲げられている。手賀沼ふれあいラインから入ることができる。

▶一週間後、杉村と西村が沼向こうの岩井に行くと、掘り上げられた丸木舟には「平将門の娘滝夜叉姫とその乳母がこの船に乗ってこの地に逃げてきた」と説明があり、さらには別の場所の丸木舟には「ヤマトタケルが我孫子に渡った時の御乗船である」との掲示があった。それを見た杉村は「そういう現代的伝説が倒る処に出来ている。今に我孫子の附近には、どんな物が掘り出されて、どんな伝説が一夜の中に出来るか知れない。船を掘りに行くが如きはそもそも末だ。掘り出せば何でも出る」と結んでいる。狂騒的なブームや思い込みの末に生まれた様々な都市伝説やフェイクニュースに向き合ってきたジャーナリスト杉村楚人冠ならではの皮肉である。人間はそうそう変われるものではないから、百年後の今の我孫子でも、私たちが知らない間に「新たな伝説」が出来ているのかもしれない。

我孫子市の湖北地区にある将門神社。湖北には古くから将門に関する伝承がある。

コラム「辻説法」について

辻説法とは、人が集まる町角（＝辻）で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

六号雑感（編集後記）

●今年は暖冬で雪は降らないかと思いましたが、テーマにあわせて雪が降りました。雪は日常の風景を一気に非日常へと変化させる力を持っているようです。●秋号に引き続き、たくさんのイベントを企画しています。暖かくもなりますので、ぜひ、お越しください。特に杉村楚人冠記念館の清接庵お茶会は４年ぶりの開催となります。●今年の桜は通年よりも早い開花になるようです。もしかしたら、記念館のお茶会では桜も愛でることができるかもしれません。（K）

発行：我孫子市教育委員会　文化・スポーツ課　〒270-1166　我孫子市我孫子 1684 番地　04-7185-1583

テーマは「雪」

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺

志賀直哉用紙

志賀直哉で「雪」と言えば、我孫子時代を描いた「雪の日」、「雪の遠足」があるが、今回は、「雪のおもいで」（一九六七）という晩年の作品を紹介したい。冒頭は次の通りである。

「子供のころから雪は好きだった。大人が雪がふり出すと、よく「悪いものがふり出しました」というのが不服だった。雪ふりことに大雪の日には家にじっとしていられず、必ず、出かけないではいられなかった。」

活発な志賀らしく、雪の中を駆け回る姿が目に浮かぶ。

「しかし今度の雪ではこの二月二十日で八十四になる私はもうそんな気はなく、去年つくった狸の皮の陣羽織を着て、軽油のストーブで温めた部屋からガラス戸越しに小さな庭に積る雪を眺めて終日暮らすより仕方なくなった。」

志賀も晩年を迎えて、好々爺として「おじいちゃま」という感じを想像できるだろう。

時の流れを思うとき、早く感じるときと遅く感じる時がある。先日九州は佐賀を訪れた。近年我孫子ゆかりの画家を追っているが、原田京平と交流があり、我孫子の志賀邸の崖上に住んだ甲斐仁代（かいひとよ）の出身地である。そのついでに種々回っているが、昨年たまたま小料理屋で知り合った農家のご夫婦と再会をするために訪れた。話は尽きず、五時間はあっという間に過ぎた。そこでご紹介いただいた神社に宮司さんを訪ねるとたまたま出かけるタイミングで会うことができ、種々お話しすることができてありがたい時間だった。オチを言うならば、その神社は志賀神社。ちなみに志賀直哉とは特に今のところ関係はみえないが、明治維新の功労者佐野常民の生誕地のすぐそばである。もし機会があれば訪れてほしい。今年も各種回り、この通信でお伝えできればと思う。

（稲村　隆）

コラム「我孫子から」について

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。

白馬城放語

杉村楚人冠記念館
学芸員コラム

フラグヒサア

記念館の冬は良い。誰が一番冬枯れの邸園を華やかにできるか競うように椿や山茶花（さざんか）や梅が咲くし、折れてしまった水仙を摘んできて花瓶にさせば、殺風景な仕事場を彩れる。その上雪など降った日には、喜びのあまり真っ白な地面に大の字で倒れ込みたくなる。難点といえば、あまりの寒さに凍えそうになることくらいであろうか。

この原稿をしたためているまさに今日…正確には昨晩であるが、我孫子には初雪が降った。開館前の雪かきで、執筆者の握力と腰は限界寸前である。鉛のように重いシャーベット状の雪をかき分けながら、広すぎる記念館の敷地を呪った。パソコンのキーボードを打つ手が震えているが、楚人冠のように手書きで執筆をするよりかは何倍もマシであるということで、今ほど文明の発達に感謝したことはない。

雪を片付ける身としては文句も言いたくなるが、それを差し引いても記念館邸園に積もる雪が作り出す銀世界は素晴らしい。邸園のかつての主・楚人冠は随筆の中で、流石とも言うべきか、銀世界の美しさにとどまらず、雪の重さに振り回される木々の様子に焦点を当てて文章を綴っている（『続湖畔吟』所収「雪と樹々」）。

随筆によると、「雪にいくじのないのは松」らしい。少し雪が積もるだけで折れてしまう。椿や山茶花、梔子（くちなし）、泰山木（たいざんぼく）といった木々も、葉が大きい分積もる雪の量が増えるため、枝は折れやすいそうだ。確かに、雪かきをしている間も泰山木や椿の木の下には枝が何本も転がっていた。「雪が積もって如何（いか）にも似つかわしいのは梅」で、「真向から雪をかぶりながら、蕾（つぼみ）が春めかしくふくらんで、中には、もう開いたのが二つ三つ見える」とある。楚人冠がこの随筆を書いたのは昭和六年二月十八日。九十三年後の令和六年二月六日、梅の花は雪をかぶりながら、ほぼ満開となっている。雪と雨の影響で、花びらは散りつつあるほどである。反対に椿の開花は例年より遅い。酷暑といい、春秋の短さといい、じわりじわりと環境が変化していっていることが、何とも恐ろしい。

（武藤真奈）

コラム「白馬城放語」について

杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆に由来しています。